
冬木立、君と手をつなぐ～神楽×総悟初デート囁～

草紙屋本舗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

冬木立、君と手をつなぐ〜神楽×総悟初デート囁〜

【Nコード】

N6137M

【作者名】

草紙屋本舗

【あらすじ】

甘いんだか、なんだか。今回はほんわか風味を全面に出してみたストーリーです。こんなデートもあったなあ…とノスタルジーにひたるもよし。こんなデートしてみたいな…ときめくもよし。神楽ちゃん、渾身のおでかけモードでがんばってるし、総悟も甘くて、ピリリと辛い山椒風味でフルスロットルです。銀魂草紙サイドもの、どうぞ召しませ、召しませ…

少し前までは金色に色づいた銀杏の葉が、まるで絨毯のように敷き詰められていた外苑前。今は、もうすっかり冬木立の並木道になっている。空は曇り空、薄い銀鼠色の雲が一面に低く広がり、もうすぐ冬將軍の到来……といった様子だ。

真選組の制服姿で、総悟が並木道を一望できるベンチに腰を下ろしていた。

「……チツ。早く来すぎやしたィ……」

ポケットに手をつっこんだまま、時折寒さに耐えかねたように足をばたばたと動かす。

「ったく、早く来やがれてんでィ……」

そうは言っても待ち合わせの時刻は朝の九時。そして今は八時半。いくらなんでも早過ぎるというものだ。

「半休しかとれなかったんだから、少しでも長く会っていてエと思つてんのに。ったくよウ……」

九時十五分前くらいになると、休日による人出の多さを見込んで、焼き栗の屋台曳きが仕込みをしに現れた。炭火釜の中に大きくびっしり身の入った栗を入れて、軽く炒って火を通す。それが焼き栗だ。焼き立ては、栗の甘味が増し増しで、そりゃあほくほくの極上風味と、今けっこう評判になっている代物でもある。ベンチにひとり座り、寒そうに身をちぢめながら待ち人來たらずの風情の総悟を見て、焼き栗屋のおやじが声をかけた。

「……旦那、ふられちゃったのかい？」

「……てやんでィ、これから来ンのを待っているところかい？」

「ずいぶん長えこと、お待ちでないかい？」

「……まあな、待っているのも楽しいってもんでさァ」

「ちよいと炭火にあたつてごらんせえ……座りつきりじゃあ体が凍

えちまうでしょう」

「…すまねエ。じゃあお言葉に甘えて、ちょいとあたらしてもらいまさア…」

炭火釜に凍えた両手をかざし、こすりあわせて暖める総悟。

「お相手はどんな方なんですか、旦那？」

「そりゃア、あっしの惚れた女だ。滅法可愛い女でイ…と言いたいところなんだが、そうはうまくいかねイ…気が強いわ、腕力もあるわ、凶暴だわ…のどうしようもねエ女でさア」

「でも、惚れていなさるんだね？」

「まアね…」

「肝心のお相手の方は、脈はあるのかい？」

「どうだかなア…でも憎からずは思っているはずでイ」

「そんなもんかねえ…、まあ、ふられねえことを祈ってまさあ」

「…大きなお世話でイ…」

そんな強がりにも似た受け答えをしているうちに、待ち合わせの時刻になったが、待ちわびている相手の神楽の姿がなかなか見えない。

足踏みをしながら地下鉄の駅方面を見ている総悟。若い女性らしい姿が見えると、確認しては小さくため息をつく。その時、携帯電話に着信が入り、上着の内ポケットからぶるぶると振動音が聞こえた。瞬速で応答ボタンを押し、電話に出る。

「…はい」

「…きよろきよろしてんじゃねエよ」

「…今、どこなんでイ？」

「おまえの真後ろアルよ」

神楽の返事を聞き、慌てて背後を見る総悟。道路を挟んで反対側の並木道のベンチの前に、イングランドチェックのワンピースに黒のボレロを着込んだ女子が仁王立ちしている。ツインテールをくるくるに巻き、その上には黒いファーでできた小さめベレー帽をちょ

こんとのせ、ちょっとゆるめの黒ベロア製のニーハイブーツをはいている。すごく可愛い。小柄ながらスタイルのよさに加え、本人の持っている雰囲気にも小物もすごく似合っている。まるでバービー人形のようなたたずまいだ。

「：まさかとは思いますが、もしかしてちっせエベレー帽をかぶっている？」

「うん」

「黒い長めのブーツに、格子柄のワンピースを着ている？」

「だーかーらー！今、おまえの目の前に立っているって何回言えばわかるんだよウツ！」

総悟は慌てて、電話を切ると反対側の並木道に向かって走り寄った。息せきって近づいてみれば、確かに人形のように可愛い女子は、神楽だった。

「：てつきりいつものチャイナ服で来るとばかり思ってたから、気づかなかったイ！」

「：ふん」

「：ってか、いったいいつからここにいたんでイ？」

「おまえが、焼き栗屋のおやじと話し始めたところから」

「なんでイ！それならそうと早く連絡してくれりゃアいいのに！」

「なんかおやじと話し込んでいたからな、聞き込みかなんかかと思っ
つてな」

「はあ？」

そう言いながら、総悟は改めて神楽の様子をしてみる。ぬけるような白い肌に赤と黒、そして白を使ったチェック柄のワンピースはよく似合っていて、見れば見るほど可愛い。髪形もいつものおだんごとは趣が違って、今日の服装にぴったりのイメージだ。

「：このまま、さらっちまいてエな」

「あん？」

「：いや、なんでもねエ。しかしなんでまた、今日に限って召かし
こんできたンでさア？」

「…う、それはア、なんというかア、たまたま昨日、別の用事のためにデパートに行ったらばア、いつのまにかア、店員のおねえさんにイ、この洋服をオすっごい勧められてしまったアル…デパートつて、ほんと恐ろしいところアルな…」

「ヘエ、それで？」

「で、ちょうど冬物の私服がほしかったしイ、そんなに勧めるなら買ってやってもいっかなアって…」

「…で、買ったんですかイ？」

「…うん」

「で、わざわざあつしと会う日に着てきてくれたってわけだ？」

「…うん」

総悟はまるで宝物に触るかのような手つきで、神楽のボレロの襟や、小さなベレー帽にそつと触れながら、耳元で小さな声で呟く。

「…めっちゃくちゃ似合ってますぜイ、チャイナもいいがこの格好も滅法そそられまさア」

総悟に囁かれた神楽が一気に顔を赤らめながら、そっぽを向く。

「別におまえのために、着ているわけじゃないしな」

その答えを聞くなり、待ってました！とばかりに総悟がニヤリと笑いながら再び神楽に囁く。

「じゃあ、脱げるようなところに行きやすかい？ふたりつきりになってエ服を脱いでもいいとこに…」

そっぽを向いた神楽がますます赤くなり、キツと総悟を睨んだかと思うと…いきなり右ストレートを総悟に向かってくらわそうとする。

「…ウおツとイ！」

左掌で神楽の拳を受け止める総悟、思わず神楽の手の冷たさに驚きの声をあげた。

「氷みてエじゃねエかイ！」

総悟は慌てて神楽の左の手もとり、やっぱりその冷たさにもういちど驚く。

「こんなに冷えちまって…！」

神楽の両手を重ね、自分の両掌の中に包みこむようにして、総悟は神楽に尋ねた。

「もしかして、おめエもけっこう前からここにいたのかイ？」

「…まあな」

「なんで、携帯に連絡しなかったンでイ？」

「…ちよっと恥ずかしかったし…」

「恥ずかしかったし？」

「おまえがすぐ嬉しそうに待っているのを見ていたかったアル…」

「…そうですかイ」

「あと、おまえがすぐ気づくだろうって思ってたんだけどな」

自分の手の中の神楽の両手をぎゅ、と握りしめて、その手の華奢なつくりがいまだに信じられない総悟だ。このやわらかい手が自分よりも重く強い拳になるなんて…

「…悪イ、ちっともあんたに気づかなくて」

「うん」

両手をそっと離し、神楽の背中に腕をまわしやさしく抱き寄せる。

「…おい、やめろって！おまえのその制服、目立つしイ、恥ずかしいんだよウ！」

「やなこったイ」

神楽の困る顔が見たくて、わざとさらにぎゅうっと抱きしめる総悟。そのまま神楽に話しかけた。

「あつしは午後から勤務なので、昼過ぎまでしかいっしょにいれねエ…。」

「どっか行きたいところとかあったら言いなせイ？」

「…ない」

「買い物とかでも、いいですぜイ？つきあいますぜイ…」

「デパートは苦手アル…」

「なんか…喰いたいもんとかはねエんですかイ？」

「喰いたいもの？」

「そう、なんでも好きなもんを言いなせイ、ごちそうしまさア」

「：じゃあ、あれ。あれが喰いたい」

神楽が指差したのは、今まで総悟がいたベンチの隣で屋台を広げている焼き栗屋だった。

「あの焼き立てを、腹いっぱい喰いたいアル！」

神楽が嬉しそうに総悟を見上げて、ニツと笑う。

「あんなんでいいんですかイ？もっとちゃんとしたもんじゃなくて？」

「あれをおまえといっしょに、腹いっぱいめいっぱい喰いたいアル！」

「：あんた」

「：ん？なんだ？」

「：ほんと、あんたってエ女は：」

「：なんだ？おまえにも分けてやるよウ？」

総悟は破顔一笑、神楽を抱きしめたまま、頬にキスをする。

「もうすげエよ、あんた！あんた、もうあっしの胆、わしづかみでさア！」

すげエ可愛い！可愛すぎる！なんかすげエよ！」

総悟が支離滅裂なことを言いながら、けれどむちゃくちゃ嬉しそうに神楽にキスをしながら抱きしめまくるのを、通行人が苦笑しながら見ている。神楽は真っ赤になりながら、離せよ、バカ！と人目を気にするも、総悟はおかまいなしだ。好きだと言っても、ふん、とか、わかってる、とかくらいしか返してこない神楽の口から「おまえといっしょに：」という言葉が出たことも嬉しい。そして、いろいろ言い訳をしているけれど、デートに備えて準備をし可愛く着飾ってきてくれたことが、いっちゃん嬉しい。いろんなことが胸いっぱいにあふれて、すげエ！としか言えない自分がもどかしく、ついキスの雨を降らしてしまう総悟なのだ。

「うおーおい！真選組の旦那アッ！」

向かい側の並木道から、声がかかる。さきほどの焼き栗屋のおやじが、なにやら手をふってこちらによびかけている。

「おい、あれ見てみる」

「…ん？」

神楽が総悟の腕の中で、おやじからの合図に気づき指をさす。総悟が振り返ると、焼き栗屋のおやじがニカッと笑いながら大きな声で話しかけてきた。

「旦那あ、ちょうど今栗が焼けたとこだけど、いらねえかああ？」

「いるー！」

総悟より先に神楽が返事をする。総悟の腕をすりぬけ、焼き栗屋の屋台に向かって道路を横断し、まっしぐらに走っていく。

「って、おい、ちょっと！」

総悟が声をかけるのも無視し、ほんとうにまっしぐら。あつという間に屋台の前で、おやじに向かって早速注文をしているのが見えた。

「ったく。あつしより焼き栗ですかイ…」

苦笑しながら、神楽の後を追って屋台前に戻る総悟。神楽は両手に3袋くらいずつ焼き栗の袋をがちり持ち、なおかつ焼き栗をほおばりすぎて、ほっぺたがハムスターの頬袋のようにばんぱんになっている。おやじに焼き栗代を払おうとした時、うっかりハムスター状態の神楽の顔を見てしまい、思わず総悟は吹き出してしまった。

「あんた…そんな面ア、まるつきりとつとこハム太郎じゃねエですか」

「いいから、早くおやじに払えよう」

総悟は笑いをこらえながら、おやじに焼き栗の代金を支払う。おつりを差し出しながら総悟に向かっておやじはにこにこ話しかけてきた。

「えらい別嬪の彼女さんじゃねえですか。旦那もすみに置けないねえ？」

「ドえらい喰い意地のはった手のかかる女でさア…」

「それも可愛くてしょうがねえんでしょ？ そうそう、こんなもんを

もらったから旦那に差し上げますよ…」

焼き栗屋のおやじが差し出してきたのは、歩いて5分ほどのところにある小さな天文台のプラネタリウムの入場券だった。

「真冬の星見も乙だと思いやすよ、旦那？可愛い彼女とどうぞ行ってくんなせえ」

「ありがてエ、遠慮なくいただきますア」

おやじに礼を言い、総悟は焼き栗に夢中の神楽を促し歩き始めた。

「こんなものをもらっちゃったイ、行ってみやせんかい？」

「おもしろいのか…？」

「ものは試しでさア、焼き栗持って行ってみやしよう」

「…うん」

半信半疑の神楽の手をひき、総悟は天文台へと向かった。

ちょうど天文台では、プラネタリウムの上映が始まろうとしており、ふたりは大慌てですでに薄暗くなり始めている会場の後ろの席についた。ほどなくして天井一面に星空が広がる…。師走の夜の星空が全面に映し出された。真ん中部分を横断するように天の川らしきものがぼんやり見え、たくさんの星がきらめいている様が、言いようもなく美しい。天文台の職員の解説が始まると、きらめいていた星が星座の形通りにつなげられ、名にちなんだ画像がいっしょにかぶせて投影される。

東の空にはプロキオン、シリウス、ベテルギウスからなる冬の大三角形が大きく輝いているのがわかる。神楽が焼き栗を喰すのも忘れ、うっとり見上げているのがシルエットで見てとれる。星に見とれているうちに、いつのまにか解説は、天球真ん中部分に位置する星座オンドロメダ王女と勇者ペルセウスの神話について話されていた。傲慢な母カシオペアの罪を償うべく生贄として捧げられていたアンドロメダ王女を、メドゥーサの首をつかって怪物から救った勇者ペルセウス。ふたりは神話さながらに天球でも寄り添っている…総悟はそっと手をのばし、神楽の手を握った。暗闇で表情はよく

わからないけれど、こうして同じ時間を共有しているのがなにより嬉しい。神楽に怒られるのを承知で、手を握ってみたが意外にも大丈夫…と思っていたらいきなり手の甲をつねられる。

「調子にのんじゃねえぞ、こらア」

声を潜めて神楽が言う。やはり神楽は神楽。アンドロメダなんかとは大違いだ…つねられた手の甲をさすりながら、総悟は苦笑した。上映が終わり、外にでる。その明るさに目をしばたかせながら、総悟が時計を見て時間を確認する。

「…そろそろ屯所に戻らねェと…」

「わかった。早く行けよ」

「……」

「……」

「…24日の金曜日は、あっしは詰番で会えねェ」

「わたしも仕事アルよ」

「いや、夜もずっと会えねェから、だから…」

「だからどうした？」

「渡しときてエもんがあるンでさア…」

そう言いながら、総悟は内ポケットの中から水色の薄い長方形の箱を取り出す。焦茶色のリボンがかかっている。

「これをおんたに…」

総悟は箱を神楽の手に乗せる。神楽のほっぺたがまたちよつと赤くなっている。

「開けてみてくだせィよ」

リボンを外し、箱を開けるとそこには真っ白のファアのミトンが入っていた。とてもあたたかそうで、てのひら側には皮素材で滑り防止の加工がしてあり使い勝手がよさそうなミトンだ。

「これがあっしからのクリスマスプレゼントでさア。受け取ってくんない」

神楽がそつと箱からミトンを取り出し、その手触りに思わず感嘆

の声をあげる。

「これ、もらっていいのか？」

「あんたに似合うと思って選んだんでイ。」

最初は真っ赤なのにしようかと思ったが、あっしから見たあんたのイメージの色のにしようと思って、これにしゃしたイ。使ってやっておくンな？」

「：ありがとな。こんなのが、ほしかったアル：」

「：そうかい」

「大事につかうアル、一生ずつつかうアル！」

神楽が心底嬉しそうにしているのを見て、総悟はちょっと安心したように小さく笑った。

「じゃ、あっしはそろそろ行かないと：」

「ちょっと待て。ちょっとだけ待つアル！」

神楽が慌てて総悟を引き止める。

「わたしも持ってきたアル：」

「：え？もしかしてクリスマスプレゼント？」

「まあ、そんなもんだ」

「：ッ！」

今度は総悟のほっぺたにさっと血の気がさして、みるみるうちに赤くなっていく。

「ほとんど手伝ってもらったけどよ：」

そう言いながら神楽は手に持っていた手提げの中から深い群青色の毛糸のかたまりを取り出す。そうしてそれをしゅるしゅるとほぐし、やおら背伸びをしたかと思うと総悟の首にその群青色のものをかけた。

「うん、まあちょうどいいかんじアル」

「もしかして：」

総悟が首にかけられたものに目を見張りながら、両手で触って確かめている。

「これって…手編みマフラーですかイ？」

「ん、万事屋のあのこに教えてもらいながら編んだアル」

「…すげェ…！」

総悟はマフラーの両端を上着の中に差し込むようにあしらった。

「すげェや、マフラーひとつだけで全然あつたけェ…！すげェ！」

「ちよっと一部分だけが、すっげでこぼこだったたりしてるけどな」

「そんなの全然わっかんねェ…すげェ、まじで」

「…嬉しいか？」

総悟がマフラーに顔を埋めながら、にっこり笑って無言でうなづく。そうしたかと思うと、急に意地悪そうな顔になり、神楽に向かつてこう言った。

「こんな手編みマフラーを編んじまうくれェだ。もうそろそろ、あつしに夢中だ、あつしにベタ惚れだって言ってみたらどうなンでイ？」

「…うるせェよ！さっさと仕事に行くアル！」

マフラーの感触を確かめるかのように、頬ずりをしながら総悟がニヤリと笑う。

「ま、そうはいつでも惚れっぷりに関しちゃア、あつしの方が上ですがね…」

「もう、いいよウ！早く行け、バカ！」

ゆでだこのように真っ赤になっている神楽のあごを自分の顔の方に向け、軽くほったチュ★とキスをする。総悟はそのまま立ち去った。まあそんな総悟自身の顔も真っ赤だったりするのだが…

その晩のこと。

定時見回りに出掛け、屯所に戻ってきた十四郎と総悟。

「…ああ、やっぱ夜になると冷え込みが厳しくなってきたやがる。すっかり凍えちまったぜイ…」

ストーブの前で、一服しようと煙草を取り出す十四郎。その時、総悟が口を開いた。

「土方さん、あっしのマフラーに煙草のにおいがついちまうんで、喫煙は外でやっておくんなせイ」

「…あ？てめエのマフラーを室内ではとりゃアいいだけのこった。俺の知ったこっちゃねエ」

「煙草、外で吸え…炎上してすぐさま死ね、土方」

「うるせエ、さつきから会うやつ会うやつに手編みマフラーの自慢をしくさって、いいかげん気持ち悪いからやめろっつの…野糞に顔つつこんでそのまま死ね、沖田」

どうやら総悟は、屯所中の隊員に神楽のマフラーを自慢して回っているらしい。しかも誰からのプレゼントかは言わず思わせぶりに「このマフラーどう思いやす？」と問いかけ、自慢しているらしいのだ。

「…ったく、恋の病とバカにはつける薬がありゃアしねエってな」

舌打ちしながら、総悟にかまわず煙草に火をつけ、うまそうに煙を吐き出す十四郎。そこへチリチリと小さな鈴の音が近付いてくる。

「お？…椿か？」

十四郎があやすよりも早く、総悟が白猫の椿を抱え上げ、椿に向かっててもマフラーの自慢をし始めた。

「ほら、見てみなせイ？このマフラー、他のものとはちよつと違うことがわかりやすかい？」

そう手編みなんでさア。ちよつとくるまってみなせイ？」

マフラーを巻き込んでいるあたりに、総悟が椿をそつと押し込むと椿は嬉しそうにマフラーに頬ずりをし、満足げににやごにやご言いながらすつかり総悟のマフラー内に落ち着いてしまった。

「…椿、おまえまで…」

「残念でしたイ、ここは愛の力技の勝利でさア。もてねエ男は黙って外で煙草を吸ってきておくんなせイ」

「…へいへい、承知いたしやしたア」

くわえ煙草のまま、十四郎は中庭に出る。外の空気は冷え冷えと冴え渡り、今にも雪が降り出しそうな天気だ。うへエ、寒イと呟き

ながら煙草片手に十四郎は、おもむろに携帯電話を取り出しメールを打ち出した。

「てなわけで、うちのアホ沖田はすっかり浮かれまくって、手編みマフラーの自慢をしまくつとります、と。で、メリークリスマス、つと。よし、送信…。おし、送信完了…ッと」

しばらくすると、送ったメールへの返信がきた。メールの文面を確認した十四郎は、ふっと笑って携帯電話をしまう。そしてそのまま、しばらく煙草を吸い続ける。そうこうしているうちに、やっぱり雪が降り出した。

「…お、雪か」

携帯灰皿で煙草の火を消し、空を見上げる十四郎。そして腹の部分をそっと触りながら、十四郎が含み笑いをしながら呟く。

「おめエのしてる手編みマフラーと、おそろいの手編み腹巻を俺は、今、してんだッつの！どっちも万事屋奥方手編みだッつの…。やっぱあったけエな…ふん、ざまーみろ、総悟め…」

★おしまい★

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6137m/>

冬木立、君と手をつなぐ～神楽×総悟初デート囁～

2010年12月2日11時40分発行